

「あの時」とつながる「今」

灰谷知子
(幼稚園教諭)

「たこを作ろう」

年少で入園したR児。入園式では、少し硬い表情と体で保育室に入ってきた。今思い返せば、私も子どもたちとの出会いに緊張していたかもしれない。「Rちゃん、待ってたよ。よろしくね」と声をかけた次の瞬間、R児の手が私のおなかにボンと当たった。いきなりR児の目の前に飛び込み、一方的な思いを伝えようとした自分の鈍感さを大いに反省する。印象的なR児との出会いであった。

初めてのことはとても慎重なR児。一学

期は、私の手をぎゅっと握り、時には私の背中に身を隠して過ごしていた。それでも好奇心はいっぱい、興味をもったことを私と一緒に繰り返して楽しむことも増えていった。

園での生活にも慣れてきた三学期。その日は風がとても強かった。手作りたこを持って走る年中児の姿がR児の目に飛び込んできた。「私も作りたい」と言うR児の思いにすぐに応えたくて、私は近くにあったビニール袋に急いで紙テープを付けて渡した。そのたこを持つとR児は園庭に出て、行ったり来たり何度も走り回り、風になったようだった。くしゅ

つと小さくなるたこは、R児の引き出しに大事に入れられ、その後も繰り返し使って遊んだ。

翌年、年中に進級した五月のこと。手形遊びを楽しんだ不織布で、子どもの体の大きさほどあるこいのほりを作った。子どもたちは喜んでこいのほりを手に持ち、新緑のまぶしい園庭を走り回った。すると、走っていたR児が、大きな声で友達や私に「たこを作ろう!」と言ったのだ。思い切り走り回った体に、たこを持って風になったような感覚がよみがえったのだろう。「たこみたいなこいのほりを作るのはどう?」と私が投げかけると、R児は喜んで受け入れ、「私のこいのほり」作りが、R児から周りの子どもにも広まっていった。

「またやりたい」

M児は年中で入園した。一月頃、いつも一緒に過ごしていた友達が欠席し、M児は小さ

く紙を切り、一人で何かを作り始めた。最初こそ不安な表情に見えたが、時折周辺の子どもと言葉を交わして長時間作り続ける姿には、心なしか余裕が感じられた。作り続けたものは、手のひらに収まるほど小さなクレープだった。メニューもいつの間にか作り、M児はそれを箱に入れて大切に引き出しにしまった。

翌日またその箱を持ち出し、ままごとの小さなテーブルで続きを作り始めた。静かに作り続ける姿からは、周りの友達も一目置くような力が伝わってきた。気づけば、ポツリポツリとその場所に寄ってきた子が、テーブルを囲んで一緒に作っていた。作り方を伝えるでも拒むでもなく黙々と作り続けるM児の周りに友達が集まり、小さな家族のようだった。その後、M児は大きな机を友達と運び、ままごとの隣でクレープ屋さんを開店させた。M児はまず私をお客に呼ぶと、「おすすめは○○

味です」と体を弾ませながら言った。私は大切にそのクレープを味わった。これまでは仲良しの友達と一緒にいることを支えに体験の幅を広げることが多かったM児。そのM児が自分一人で始めたことから動きだそうとする姿を、私はうれしい気持ちで見守った。

その翌週、年長児がM児の保育室の目の前でリレーを始めた。保育室からよく見える場所が始まったリレーのにぎやかな雰囲気にかかれ、多くの年中児が加わった。リレーの輪の中にM児も入っていたことに、私は驚きを感じるとともに、また一歩体験を広げようとする姿を応援したい気持ちでいっぱいになった。翌日登園すると、「またリレーがしたい。年長さんに言ってくる」と誰よりも先に言ったのはM児だった。一緒について行くのかという思いが頭をよぎったが、自ら年長の保育室に向かうM児の背中には、「私が言ってくる」という強い意志すら感じられ、私はただ後ろ

から応援するばかりだった。年長や、年長の担任にしつかりと話を受けとめてもらったM児がカラー帽子やバトンを借りて、リレーが始まった。何周か走ると、次はサッカーに移り、小さな体にビブスを着せてもらったM児たちは大喜びだった。初めての体験や大勢の友達の中ではきゅっと体が硬くなることもあったM児が、思い切り走り回り、ボールを追いかける姿は、今でもはつきりと脳裏に浮かぶ。

そして再び「サッカーをやりたい」

年長になったM児。この日は久しぶりに、砂場で遊び始めた。長いシャベルを手にして砂場の縁に座り込んで穴を掘る姿は、シャベルに体を動かされているようなきこちなさがあった。それでもずっと使い続けるうちに立ち上がり、両足で砂を踏みしめるようになっていった。M児自身、手応えを感じたようで、動きは大きくなっていった。目いっぱい遊ん

だ後、昼食を食べる表情はとても明るかった。

そしてM児は昼食後、うれしそうに「サッカーをやりたい！」と私に言ってきたのだ。なぜ急にそう思ったのかしらと、一瞬の戸惑いが私の顔に表れたかもしれない。M児はすかさず「あの洋服も着てね！ サッカーやりたいの。ボール出して」と言った。M児の自信にあふれた表情を見た瞬間、私の記憶に、年中の時のM児の姿が鮮明に思い出され、急いでサッカーボールとビブスの用意をしなくては、と感じた。ボールを持ったM児がまず向かったのは、予想どおり、あの時に初めてリレーやサッカーをした場所だった。その日はちょうど年長だけが弁当のある日。あの時と同じ小さな場所で始まったサッカーだったが、ボールはいろいろな場所に転がり、いつの間にか園庭全面がコートになり、次々といろいろな子が加わって、にぎやかで自由なサ

ッカーが続いた。砂場で体を存分に使って遊んだM児の体からは、自分がやろうとしたことに友達がかかわってきたときに得た自信と重なるものが伝わってくるように感じた。

「あの時」を「今」につなげる

子どもが「またやろう」と記憶を呼び戻す意識は、大人以上に本能的で、感覚的なのかもしれない。体に残る「あの時」のうれしさや自信を「今」の自分につなげることが、自ら動きだそうとする力になっていることを、R児やM児の姿から感じた。

「今」その瞬間に湧き上がる思いを、一つ一つ丁寧に支えることも大切だろう。だが時には、「あの時」と「今」とをつなげようとする子どもの思いを繊細に感じ取り、一人ひとりが紡ぐストーリーをつなげて理解しようとすることも大切にしていきたい。